

大好き！お兄ちゃん

東京都 井口 香奈子

私の父と母は共働きなので、いつも家にはいません。だから私はお兄ちゃんと家で留守番です。お兄ちゃんはいつも私を大切にしてくれました。私が次の日テストなのに勉強していないと言うと「やらないと駄目だぞ！香奈子はやればできるのだから」と言って夜遅くまで勉強をみてくれました。お兄ちゃんには新聞配達のアパートがあるのに、私がかかるまで教えてくれました。

あの日の朝、台所へ行くと母が朝食の用意をしながら「お兄ちゃん遅いね。おかしいね。事故にあったんじゃない？」と言っていました。いつもはどんなに遅くなくても新聞配達のパイトから絶対帰ってくるお兄ちゃんなのに、あの日の朝は玄関のドアが開きませんでした。そして警察からの電話が鳴りました。そこから悪夢の始まりです。母はくるったように床に倒れさげび出しました。私は母を抱きしめながら「お母さん！落ち着いて」と言いました。父は出張でいなかったので、母は警察の人に「気が動転しているなかで運転するのは危ないので一人では来ないでください」と言われたのに自分で運転をして飛び出して行きました。私はお兄ちゃんが帰ってきたら食べるだろうと思い、朝食にラップをかけて、居間で母からの電話を待ちました。母に言われたとおり、親類に電話をして一時間ぐらい待ったところで連絡が来て、いとこの運転する車で病院へ向かいました。

お兄ちゃんは、病院のベッドの上で冷たくなっていました。いつも汗をかいてピンク色の頬をしていたお兄ちゃんが、青白くなっていました。その横で今まで見たことのないくらい小さな小さな母が体全身で泣き叫んでいました。私はその恐ろしい光景を死ぬまで忘れたいと思います。私も体中の水分が全部なくなるくらい泣きました。おかしくなるくらい泣きました。

母は三日間何も食べず、頬もこけて目に見えるようにやつれていきました。私は泣き続ける母が別人のようで見ているのが悲しく、何もしてあげられませんでした。こんなとき、お兄ちゃんなら私ができることもかたんにしてあげられたらと思うました。家に来た人がみんな、「お兄ちゃんのみまでお母さんを守ってあげないといけないよ」と言い

ました。そう言われるたびに、私にはできるわけがないと思いました。お兄ちゃんがいたから、母を守ってこられたのです。でも、お兄ちゃんの写真の前で泣きながら座りこんでいる母を見て、これからは母を守ってあげられる強い人にならなければと心に決めました。

お兄ちゃんはずらいことがあるとすぐ泣く泣き虫の母に「僕がお母さんを幸せにしてあげるよ。もう泣かなくていいよ。いつもみたいに笑っていてくれ」と言います。母はいつもお兄ちゃんに元気づけられていました。お兄ちゃんがいなくなって母は笑わなくなりしました。最近はずすこすこ笑ってくれるようになりなした。でもよくお兄ちゃんの部屋から目を真っ赤にして出てきます。私に気付かれないように目をこすりながら下を向いています。

お兄ちゃんを返して下さい。お兄ちゃんは悪いことなんてしたことがありません。お兄ちゃんみたいに優しい人はいません。太陽のように光りかがやいていました。これから大学生活を楽しもうとしていたお兄ちゃんです。どうして一瞬のうちにうばってしまうのですか？

三月の寒い日、私は母と、新しく入学する高校の制服を取りに行きました。家へ帰って制服を着た私を見て、母はポロポロ涙を流しながら兄の祭壇の前で「お兄ちゃん！香奈ちゃん高校生になったんだよ。一緒におめでとう言おうね。がんばったから受かったんだよ」と言いました。私も涙が止まりませんでした。お兄ちゃんも見てくれた気がしました。入学式の日、他のお母さんはうれしそうに笑っているのに、私の母だけはまた泣いていました。

母はお兄ちゃんがいなくなってから一度もお兄ちゃんの夢は見えていないと言いますが、私は二回お兄ちゃんの夢を見ました。夢を見たことのない母は「夢でいいからお兄ちゃんに会いたい」と言います。でも私は夢ではない本物のお兄ちゃんに会いたいです。そして大きな声でお兄ちゃんに何度も言いたいです。「お兄ちゃん、大好き！」って。

